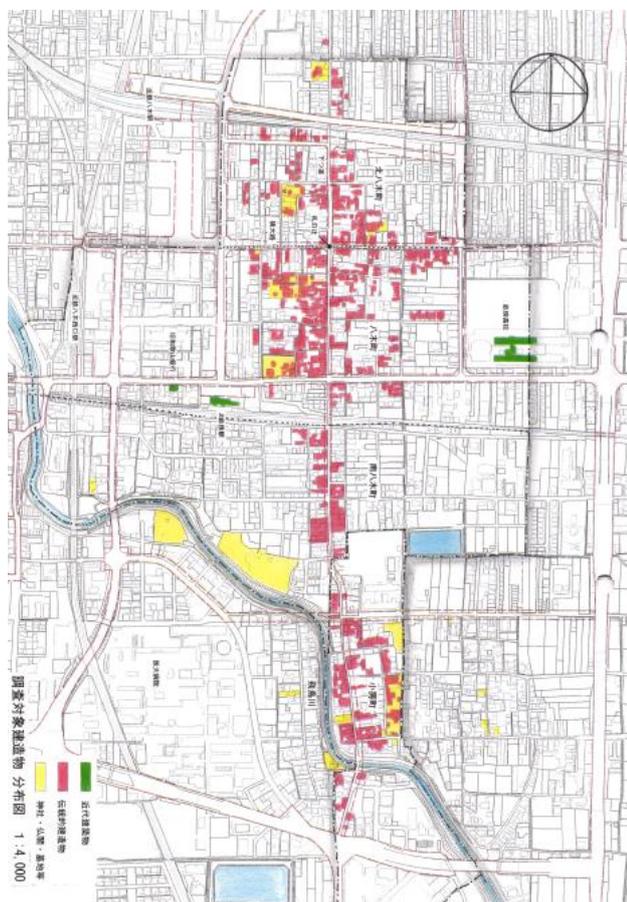


八木札の辻界隈の町家及び町並みの調査



八木地区の伝統的建造物の分布図

(1)八木札の辻界隈の概要

八木札の辻周辺は、古代は東西を横大路、南北を下つ道が通り、近世には、東西を伊勢街道(初瀬街道)、南北を中街道(奈良・吉野街道)が通る、交通の要衝であり、今でも伝統的な町家や町並みが残されており、歴史的市街地を形成している。

平成 13 年に、有志により結成された「八木札の辻の町並みを考える会」は、平成 13 年、14 年に町並みの外観調査を行い、日本瓦葺き、漆喰壁、ツシ 2 階や格子構え等間等町家型の特徴をもつ民家が街道沿いに建ち並んでおり、これらの歴史的環境を活かすことが必要ではないかとの認識に立った。また、JR 畷傍駅駅舎、旧和歌山銀行榎原支店、奈

良県立畷傍高校などの近代建築物も散在している。しかし、次のような問題点もまた明らかになった。中心市街地として空洞化も進み空き地がめだつとともに、歴史的景観と調和しない建替えが進んでいる。地区内の道路の多くは、狭路道路であり、建築物の建替えができない敷地もある。

(2)八木札の辻界隈の町家実測調査

「八木札の辻の町並みを考える会」では、所有者の協力をいただき、実測調査を行い平面図及び立面図を作成した。また、調査に当たり、棟札・家相図等の資料も収集した。

(3)八木札の辻界隈の町並み調査

八木の札の辻界隈の町並みを表現するため、地区内の南北の街道である「下つ道」の米田家から好川家までの連続立面図を作成した。



八木下ツ道沿いの連続立面図

(4)札の辻の旅籠建築

東の平田家は西の平田家とともに、過去に何回か八木町の文化財として調査されている。昭和 33 年（1958 年）発行の「橿原市史」、および昭和 50 年（1975 年）発行の「橿原市の文化財」に当時の平面図や写真とともに所見が記されているので、その一部を抜粋する。

「橿原市史」より

街道の交差点に向かい合って今も二軒の昔の宿屋の建物が残っている。一軒はこの時計屋の平田家で、他は酒屋の平田家である。

いずれも二階であって、二階はほとんど客用の室で占められ、街道に面して狭いぬれ縁を出し、手摺をまわしている。屋根は本瓦葺、庇は棧瓦葺、奈良街道の方を正面とし伊勢街道に沿う側を通り庭にし、街道筋には格子窓をつらねる。建物は桁行七間半、梁間四間半の主屋とこれと直行し、伊勢街道に沿う桁行三間、梁間四間半の角屋よりなり、両棟の入隅に中庭をはさむが、下にはここに小さな平屋建ての離れを作っている。

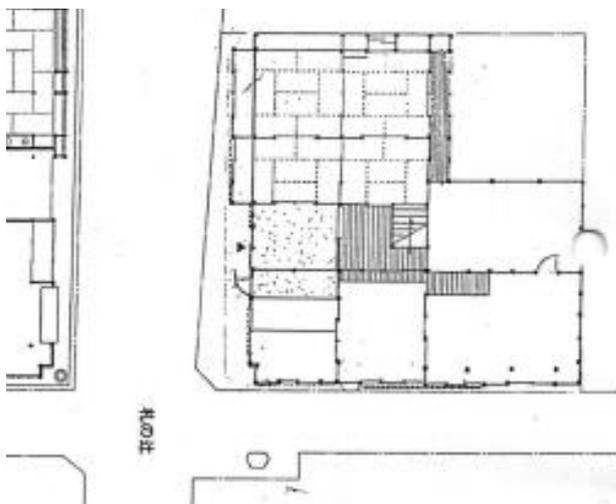
まずあげ戸を用いる入口を入ると片手に帳場があり、その奥の土間に接して、階段のある室があって客の出入口になって、ここから廊下、階上に通じ、廊下には奥に二つの客室をおく、廊下角屋の部分は台所まわりである。階上では角屋の半分を台所上の「つし」として客室部と壁で遮断し、客室は主屋の表裏二ならびと、角屋の半分に設けるのであるが、主家の方では棟通りに半間の中廊下を作って、各室に通じるようにされている。なお元は背面の廊下入隅に接する三畳間から、階下へ階段の作られていた痕跡がある。

「橿原市の文化財」より

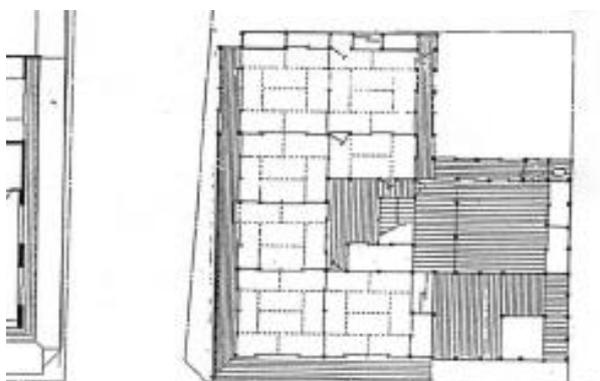
札の辻北東角で、西北角の平田禎次郎氏宅（東の平田家）と向き合い、二軒とも旅宿を営んでいた。

本二階、北東隅を書いて街道に面して鍵の手に建ち、西側を正面、東は角屋とし、西側南北棟の南端を入母屋、北端と東端は切妻造とする。道に面して二方に瓦庇を設け、大屋根は本瓦葺、庇は棧瓦葺で、現在時計店を営んでいる。……(中略)……

当主の寅之助氏によると、当家は平田禎次郎家より五年程度後の建設で、国鉄桜井線が開通するまで旅館を営んでいて、大峯・伊勢まいりでにぎわった。また魚問屋を営んでいた時期もあり「辻嘉」と言う屋号であった。『西国名所図会』に見える札の辻に描かれた旅館は現在の両平田家である。建設年代は江戸時代の末と考えられるが、旅籠屋の建築として特に珍しい家である。



東の平田家 1階平面図 ↑北



東の平田家 2階平面図 ↑北

(NPO 法人 八木まちづくりネットワーク(旧八木札の辻の町並みを考える会)活動報告書より)